

# 世界遺産の宝庫 ドナウ川

～皇妃エルジェーベトの愛した街 ブダペスト～



ハンガリーなどの東欧諸国は、季節が日本より概ね1カ月ほど先に進んでいます。11月はまだ初冬の装い、ヨーロッパの初冬の雰囲気を楽しむには今頃がちょうどいい時期かもしれませんね。

さて、ヨーロッパで観光客に人気のある川で思い浮かぶのはパリのセヌ川（約780km）、ロンドンのテムズ川（約350km）、ドイツのライン川（約1,230km）、そして、オーストリアやハンガリーなど東欧諸国を流れるドナウ川でしょうか。

中でもドナウ川は、全長約2,860kmにも及ぶヨーロッパ第二の大河です。ちなみに、最長は主にロシアを流れるヴォルガ川（約3,690km）です。



地図：Wikipedia Commons

ドナウ川は、ドイツ南部のシュヴァルツヴァルト（黒い森）と呼ばれる地帯に源流があり、そこからオーストリア～スロヴァキア～ハンガリー～クロアチア・セルビアの国境沿い～ルーマニア・ブルガリアの国境沿い～モルドバ～ウクライナとヨーロッパ諸国10カ国を流れ、黒海に注ぎます。このドナウ川流域には数多くの世界遺産があり、「世界遺産の宝庫」と呼ぶにふさわしい地域になっています。

ドナウ川流域や周辺の世界遺産を上流域から下流域にかけて、一覧にしてみましたので、ご覧ください。

- ・レーゲンスブルク旧市街とシュタットアムホーフ（ドイツ）＊文化遺産
- ・ローマ帝国の国境線：ドナウのリーメス（オーストリア、ドイツ、スロバキア）＊文化遺産
- ・ヴァッハウ渓谷の文化的景観（オーストリア）＊文化遺産
- ・ウィーンの歴史地区（オーストリア）＊文化遺産
- ・シェーンブルン宮殿と庭園（オーストリア）＊文化遺産
- ・ブダペスト：ドナウ河岸とブダ地区、アンドラーシ通り（ハンガリー）＊文化遺産
- ・スレバルナ自然保護区（ブルガリア）＊自然遺産
- ・ドナウ・デルタ（ルーマニア）＊自然遺産

※今年 2021 年 7 月にオンライン開催された世界遺産委員会で、オーストリアなどの『ローマ帝国の国境線：ドナウのリーメス』が世界遺産に登録されました。

ドナウ川は、上流域から中流域にかけては多くの文化遺産が点在し、下流域では自然遺産が見られます。ドナウ川流域にこれだけの文化遺産があるということは、ドナウ川が人々の生活に密接に関わっていたと言えますし、自然遺産によって、動植物の生態系にも大きな影響を与えていることが分かります。



このドナウ川には多くのクルーズ船が運航していて、日本人観光客に人気のある航路は、ドイツのパッサウから乗船して、ヴァッハウ渓谷、ウィーン、ブラチスラバ、そしてブダペストまで3泊4日前後で巡る航路があります。こういった船旅は、クルーズ船内に宿泊するので、移動がとても楽です。一般的なパッケージツアーでは、めったに立ち寄らないスロバキアの首都、ブラチスラバに立ち寄れるのも、魅力です。スケッチ旅行で訪れるグループもあります。時間のない方は写真を撮って、帰国後に制作することが多いようです。船内の客室から窓越しにスケッチをする方もいますが、<sup>あぶらえの</sup>油絵具が船内の壁やカーテンなどに付着するとなかなか落ちないので、水彩絵の具をおすすめします。また、停泊中の船上からは、両岸の風景などをスケッチできます。ドナウ川クルーズは、川幅が狭いため、両岸の移りゆく風景に飽きることはありません。クルーズ船の全長はおよそ 120m~140m 前後。船内の客室やレストラン、売店などもコンパクトにまとまっていて、大型客船の外洋クルーズとはまた違った魅力があります。

さて、今回は、ドナウ川クルーズの観光の終点、「ドナウの真珠」と称されるブダペストに注目してみたいと思います。

ブダペスト観光が一般的になったのは、ここ 30 年です。つまり、旧ソ連や東欧諸国の民主化運動ペレストロイカが終焉を迎えてからのことです。私が最初にブダペストを訪れたのは 1990 年、ベルリンの壁の崩壊した翌年のことです。街並みは古い建造物ばかりでした。食料品は西洋諸国とさほど遜色はなく、当時の東欧諸国の中では最も西側諸国に近いという印象を持ちました。当時の国名は「ハンガリー共和国」、現在の国名は、共和国を取って、そのまま「ハンガリー」です。

「ブダペスト」が世界遺産に登録されたのは 1987 年、ペレストロイカが始まった頃で、旧ソ連側の東側諸国であった時代。登録名は「ブダペスト、ドナウ河岸とブダ城地区」として、『ホローケーの伝統的集落』とともに、ハンガリーで最初の世界遺産となりました。その後、2012 年にアンドラーシ通りと、その下を走るヨーロッパ大陸初の地下鉄（1896 年開通）が追加登録され、登録範囲が拡大された経緯があります。ブダペストは、観光名所などが広域にわたって点在しているため、徒歩観光には不向きです。個人で観光するには、地下鉄やタクシーを上手に乗りこなした方が良いと思います。

また、ブダペストの街を観光していると、「エルジェーベト」の名前をよく耳にします。ドナウ川にかかる「エルジェーベト橋」、フランツ・ヨーゼフ 1 世と皇妃エルジェーベトの戴冠式が行われた「マーチャーシュ教会」、郊外のヤーノシュ山の「エルジェーベト展望台」、近郊の町グドゥルーに在るエルジェーベトが頻りに滞在した「グドゥルー宮殿」など、エルジェーベトに因んだ名所、旧跡がたくさんあることに、驚かされます。しかしながら、「そもそもエルジェーベトってドイツ人で、オーストリアの皇妃じゃないの……？」とお思いになる方も、いるのではないのでしょうか。歴史を振り返ればわかることですが、1867 年にハンガリーはオーストリアと和平を結び、オーストリア・ハンガリー二重帝国となった際、オーストリア皇帝フランツ・ヨーゼフ 1 世がハンガリー王としてエルジェーベトとブダペストで戴冠式を行いました。さらに、ハンガリー語を流暢に話せるようになったエルジェーベトは、ハンガリー国民から絶大な信頼を得るまでに至りました。150 年近く経った現在でも、愛されているのです。

皇妃エルジェーベトは、かなりの美貌の持ち主であったとされています。今回は、その彼女の肖像画をご紹介します。



フランツ・ヴィンターhalter  
『皇妃エルジェーベト』  
1865 年／王宮家具博物館蔵

こちらは、フランツ・ヴィンターhalter（1805 年～1872 年）という画家が 1865 年に描いた作品です。日本でこの画家の名前を知っている方は、少ないかもしれません。

ヴィンターhalterはドイツ出身の画家で、主にフランスで活躍しました。時は 19 世紀半ば、絵画史上では、ロマン主義から写実主義へと、徐々に移行していった時代です。ヴィンターhalterは、フランスの宮廷画家にまで上り詰め、フランスだけでなく、スペインやオーストリアなどの王侯貴族などからも肖像画の制作依頼が殺到したことなどから、その実力の程が窺えます。ヴィンターhalterと同時代、または近い時代の肖像画家で、日本でもよく美術展覧会で紹介される画家が、ふたりいます。ひとり、今年 2021 年 1 月に「マイスターのささやき」で紹介したフランス人画家ジャック・ルイ・ダヴィッド（1748～1825 年）です。彼はナポレオン・ボナパルトに見出されました。もうひとり、マリー・アントワネットの肖像画で知られる、フランス人女流画家、ヴィジェ・ルブラン（1755



年～1842年)です。ダヴィットやルブランがヴィンターハルターより日本での知名度が高いのは、ナポレオンやマリー・アントワネットという知名度の高いパトロン存在があったからだと思います。彼らも「最高の宮廷画家」と称賛されましたが、主にフランス国内で活躍した画家です。ヴィンターハルターのように、外国の王侯貴族から頻りに制作依頼があった画家は、当時としては珍しいのです。

では、肖像画作品『皇妃エルジェーベト』を見てみましょう。

エルジェーベト自身は、170 cmを越える長身であった、とされています。この作品の頭部の大きさと身体全体のバランスから考えても、背が高かったことが容易に推測できます。ドレスで脚の部分は見えませんが、頭部の大きさからすると、足が長すぎるようにも思えます。しかし、この作品はこれで「正解」です。高貴で優雅に見せるための、画家の演出だからです。

背中越しに光があたり、手前のドレスや周囲を暗くして、エルジェーベトの姿を浮き立たせています。赤い花を強調せず薄く抑え気味に、扇子や花飾りをさり気なく描くことにより、エルジェーベトに高貴な印象をもたらしています。遠くには山並みでしょうか、風景が溶け合って見えます。この遠景の感じがとても良いですね。全体にふんわりとした背景に、画面右上の列柱を描くことで硬質な印象を出し、画面全体を引き締めています。とてもバランスのとれた「気品」を感じさせる作品に仕上がっています。エルジェーベトも、この作品をたいへん気に入ったのではないのでしょうか。

王侯貴族が求めるのは、威厳、権威、存在感などが表現されている作品です。また、女性は、美しく描かれるだけではなく、「品位」をもって描かれることが重要となってきます。

肖像画は、ただそっくりに描けばいいものではありません。たとえば、写真はその一瞬……、微笑んだ顔、怒った顔、不機嫌な顔……、同じ人でも、まるで別人のように様々な表情を捉えることができますが、肖像画はその一瞬の表情を「永遠に残す」という宿命があります。どういった「表情」を描き切るか——、それで「肖像画家の価値」は決めます。この描き分けができるかどうか、重要なのです。ちょっと脱線しますが、外国人の描いた日本人の肖像画、広い意味での「顔の絵」を見たことがあると思います。似ているけれど、なんとなく“日本人っぽくない”。このような印象をお持ちになったことはありませんか。これと同様に、日本人の描いたフランス人の「顔の絵」をフランス人が見ると、“西洋人だがフランス人とはちょっと雰囲気の違い、どこの国の人かわからない”、といった話になります。まさに18～19世紀のヨーロッパの肖像画も同じで、描かれた側の国民性や地域性、雰囲気やちょっとした仕草まで、表現されなければ、「真の肖像画」とは言えないのです。ヴィンターハルターは、それができたからこそ、ヨーロッパ各国から制作依頼があり、その作品が受け容れられたのだと考えられます。

『皇妃エルジェーベト』を描いた画家は他にもいますが、ブダペスト市民にとっては、ヴィンターハルターのこの作品が最も『皇妃エルジェーベト』の印象に近いものだったのだと思います。

ブダペストには、エルジェーベトに縁のある名所、旧跡が多く、歴史との繋がりを考えれば、この作品が世界遺産登録への道のりにひと役買っているのかもしれませんが。しかし、この『皇妃エルジェーベト』の肖像画が展示されているのは、実はブダペストではなく、ウィーンに在る「王宮家具博物館」です。この博物館には、ハプスブルグ家の使用した家具やエルジェーベトゆかりの品々が展示されています。一方、ハンガリー国内では、ブダペスト王宮内に在る「ハンガリー国立美術館」と英雄広場に隣接する「ブダペスト国立西洋美術館」が、二大美術館となっています。国立美術館はハンガリー人画家の作品を中心に収蔵し、西洋美術館はラファエロ、ルーベンス、ベラスケスなどヨーロッパ各国の巨匠の作品などが展示されています。後者の作品の多くは、ハプスブルク家に仕えたエステルハージ・ミクローシュ伯爵が蒐集したもので、特にスペイン絵画は充実しています。スペイン絵画が多いのは、ハプスブルク家の政治的背景によるものでしょう。

世界遺産検定公式 HP では、“ドナウの真珠”ブダペストとハンガリー美術についての記事がありますので、合わせてお読みください (<https://www.sekaken.jp/whinfo/monthwh/w011/>)。その中で、ブダペストは、旅をするのに最も良い都市に選ばれたことが書かれています。確かにそうだと、私も思います。ブダペストの街を歩いてみると、街並みが落ち着いていて、かつ広々として、とても爽やかに感じます。夜のライトアップされたドナウ河岸の夜景は、他のヨーロッパの都市には無い、厳かさがあります。皆さんもぜひ、行かれてみてはいかがでしょうか。

沼田政弘

～ちょこっとコラム～

もうすぐクリスマスですね。ヨーロッパの人々にとっては、待ちに待ったクリスマス、楽しみです。ヨーロッパ各地では、11月から年末にかけて、クリスマス・マーケットが開かれます。特にドナウ川添いのドイツやオーストリアの町や村ではクリスマスイベントが盛大に行われます。ブダペストでは、聖イシュトバーン大聖堂のクリスマス・マーケットが人気です。厳かで華やかなイルミネーション、ヨーロッパ独特の神聖な世界へと誘われ、日本では味わえないクリスマス気分に入ることができます。小雪が舞う中、気の合う仲間と温かいグリュニューワインを片手に、マーケットを散策してみたいですね。

